

令和 7 年 9 月 1 日 発行
企画・編集 松崎 靖
発行 (株)足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380 (〒376-0101)
Tel 0277-73-1212
Fax 0277-70-1066

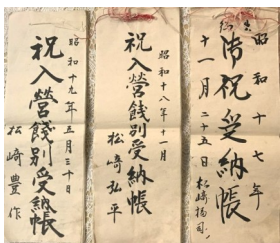
虹の架橋は足利屋・さくらも一るアスクが毎月1日発行する地域新聞です



今月の題字
野口智子 (さとこ) さん

(東京都板橋区)

野口さんは、みどり市でもお馴染みの水彩画家。虹の架橋30周年記念冊子『題字な友だち』の表紙も描いていただきました。アリの10匹ありがとう。



祝入營銭別受納帳
叔父の弘平は十八年に二十歳で学徒出陣で出征し、その下の叔父の豊作は十九年

今年には戦後八十年の節目の年であり、我家でも父や叔父たちの戦争の体験を語り継ぎ、今、生きている有難さを家族全員で感謝したいと思っています。
我家では、父・松崎福司が昭和十七年十一月二十六日に二十

小耳にはさんだ
いい話
(文責・靖)
《361》

我家の第二次世界大戦

に海軍飛行予科練習生(予科練)として十六歳で入隊しました。その時の「御祝受納帳」には親戚や近所の人たちの名前が百人以上も記されています。三人の子供達が次々と出征した時の祖父父母の心や、前橋から大間々へ嫁いですぐに夫を送り出した私の母のことを思うと心が痛みました。幸いにも三人無事に生きて帰ってくれたので私たち姉弟や従兄弟が生まれ、今も皆、仲良く暮らしています。
父は終戦後、捕虜となり、シベリヤに抑留されました。その時の様子を記した「戦慄の思ひで」と題する父の手記には、過酷な強制労働の様子などが記されていました。

昭和二十一年九月八日、強制労働へ行くために小さな舟に大勢の捕虜が乗せられ、アムール河支流の川を渡りました。その時、舟が激流にのめ込まれ、三十六人のうち二十四人が亡くなるという大惨事に遭いました。父が生き残れたのは、数日前に戦友が川に飯盒を落としてしまい、その飯盒が左岸へ流れて行ったのを思い出し、元の岸へ戻るのではなく左岸へ向って泳いだお蔭でした。その時の情景が父の手記に記されています。
「...流れにまかせて左岸へ向かった。睨に家族の顔が次々に浮んでくる。『しっかりしろ、死んじや駄目だぞ』と励ましてくれる。故郷の山々や高津戸の峡谷も目に映る。そ

うだ、家族は毎日俺の無事を祈っているのだ。絶対死んではならない。そう思うと急に元気が沸いてきた。...」
極寒のシベリヤでの抑留生活に耐え抜いた父は昭和二十二年六月二十六日に舞鶴港に着き、念願の故郷の土を踏みました。その後、命を落とした戦友の家を一軒一軒探し歩き、抑留生活の様子を伝えてきたと最後に記しています。
父は死ぬまで毎年、四月二十九日に靖國神社に参拝し、亡くなった戦友に手を合わせていました。私の名前の「靖」は、靖國神社の「靖」だと父は生前よく言っていました。



父・松崎福司

親子孫祇園囃子の撥(は)さばき
六十年前に私が習った祇園囃子を三十年前に娘や息子が叩き、今年は愛妻や娘夫婦や孫と一緒に親子三代で山車の上で太鼓を叩きました。
大間々祇園祭は、上州三大祇園と称され、四年後には四百年を迎えます。五穀豊穡、悪疫退散と、町民の心をひとつにしたいという願いから、京都の八坂神社の御分霊をいただき、大間々祇園祭りを始めた神明宮の宮司・大楽院勝尊の願いが受け継がれています。
少子高齢化で祭りの担い手が減っていますが、変えてはいけなものを守り、時代の変化に合わせて祭りを続けたいものです。



七代目三遊亭圓楽襲名興行
11月29日(土) 13時半開演
会場：ながめ余興場
木戸銭：4,000円(自由席)
チケット販売開始9月1日(月)
市内販売所は1丁目小屋設計、3丁目みどり市観光協会、4丁目足利屋洋品店、7丁目シイナ
お問合せは、0277-76-1270
全国芝居小屋会議実行委員会事務局

旧東村花輪出身の古美門佳一郎さんが描いた奥日光小田代ヶ原にある白樺『貴婦人』の絵は足利屋やアスクで時々展示している作品です。この絵に魅せられて数年前に親友と二人で奥日光へ行き、『貴婦人』を観てきました。男体山の山裾に立つ白樺は正に貴婦人の品格を湛えていて感動したのを昨日のことのように覚えてます。昔、古美門さんから油絵を教えていただいたことがありました。絵は、描いた人の思いと、その絵を見る人の思いがひとつになり、感動の世界が生まれます。この絵を見るたびに、もう一度、この白樺を親に行きたくなります。

世界一小さな
足利屋
トイレ美術館

今月の絵《361》
古美門佳一郎さん『貴婦人』



令和7年8月19日(火)
今日から3日間、足利屋は店休日。3か月前から家族5人で大阪関西万博に行くことに決めていた。新幹線、ホテル、万博会場の時間予約まで全て娘の恭子がネット予約した。大阪桜島駅から送迎バスで15分。万国博や大屋根リンクが見え、生きた蛇の列、スズメ西園の入場バーコードを見せてゲートを通過した。会場内は現金は使えず食事や土産代、万博記念グッズを買うのもキャッシュレス決済だった。大屋根リンクの目録と海風で猛暑から少し救われた。「未来の都市」の会場にあった「私たちは幸せになるために生きている」というメッセージが心に響いた。エオルギアやコロムビアや食糧問題もクローズした後の地球の姿に希望を感じた。5年後、孫が高齢者になる頃はどうなる世界になっているだろう。幸せなる高齢者たちが婆(ババ)と爺(オヤジ)で子供たちと楽しく暮らしている姿を想像してみた。



虹の架橋
検索で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百六十二号は令和七年十月一日(水)発行予定です。

♡ やつちゃんの似顔絵提供：ひさかさん